

カノポス容器にみる副葬品としての特異性

小林 慧

はじめに

カノポス容器は、古代エジプトにおいて使用された臓器の保存を目的とする副葬品である。遺体をミイラに加工する際に取り出された臓器を最初は箱や壺に入れて保存していたが、新王国時代からは臓器の入った4つの壺をひとつの箱に収める形で保存した。これらを総称してカノポス容器と呼ぶ。

古代エジプトにおける副葬品には、カノポス容器のようにひとつひとつに具体的な役割を持つものが多い。例えば死後、死者が冥界を旅する間に必要とされる「ウジャト（ホルスの眼）」のように、呪術的な守護の役割を持つものや、生前に被葬者が日用品として使用した家具や鏡・化粧道具、あるいは埋葬用に新たに作られた装身具や家具などが副葬品として埋葬された。それらの中で棺以外に故人の遺体を収容しているのはカノポス容器のみである。本来副葬品は玄室とは別の部屋に保存されているケースが多いが、カノポス容器が置かれる場所は玄室内である。容器が置かれる方角の違いや壁のニッチ・床下といった場所の違いは、時代によって差異がみられるが、カノポス容器の多くは石棺の近くに置かれている。カノポス容器が他の副葬品のように別部屋に移されなかった理由としては、遺体の一部を収容していたことにより、遺体と離れた別部屋よりも遺体に近い玄室内に置くことを古代エジプト人たちが望んだ可能性が挙げられる。そのため、遺体を収めている石棺の近くがカノポス容器の定位置となったのである。

本論では、カノポス容器が石棺とのつながりが強い点、例えば両者が故人の遺体の一部を収めているという共通点から、カノポス容器が他の副葬品とは異なった役割を担う副葬品であったことに注目する。第1章では、古代エジプト

における死生観がどのように形成されたのか、また人々の「死」という存在の受け入れ方や来世観を確認することにより、葬送儀礼の際に欠かせなかった副葬品の必要性を示す。第2章では、他文化に類を見ない古代エジプトにおける副葬品の多様性とそれらの役割を紹介する。また、副葬品の必要性と各時代における副葬品の定義を定める。それらを踏まえ、カノボス容器が副葬品の中でどのように位置づけられるのか、また被葬者にとってカノボス容器がどのような意味をもっていたのかを検討する。第3章では、副葬品としてのカノボス容器の特異性をそれらが置かれた場所、神々の図像表現、壁画の内容から考察し、明確にすることを試みる。

以上、カノボス容器独自の役割と他の副葬品とは異なる特徴を明らかにすることは、複雑な葬送儀礼を求めた古代エジプト人たちの死生観・来世観を理解する一助となる。

第1章 古代エジプトの死生観・来世観

古代エジプト人は来世の存在を信じ、死後に再生と復活を望んでいた。それは、遺体をミイラに加工したことや多くの副葬品、そして墓の建造など死者を手厚く葬っていたことからわかる。死生観を持つようになったひとつの要因は、古代エジプト人を取り巻いていた自然環境であった。ナイル川の氾濫を生命活動の復活ととらえた点や、太陽が東の地平線から昇り西に沈み、冥界である地下世界を旅し、夜明けとともに再び現れるという動きからも、古代エジプト人は再生復活の概念を見出した。そのために、再生復活という考えは、古代エジプトのような環境に暮らしていた人々にとって決して特殊なものではなく、自身もその再生復活のサイクルに組み込まれた存在であると認識していたのである。ナイル川を隔てて存在した砂漠にも来世の概念を形成する要因がある。そこでは作物が育たず、人間が暮らせない不毛の地と認識されていたために、地上における死者の世界と考えられていたからだ。身近に存在していた生と死のサイクルによって、古代エジプトでは死後の世界に対するイメージ、つまり死生観と来世観が創造されたのである。そのために現在でも残存する「死

者の書」に代表される宗教文書、あるいは棺や壁に描かれた図像から、彼らが来世をどのようにとらえていたのかを知ることができるのである。

古代エジプトにおける最古の宗教文書は、古王国時代にピラミッドの内部に刻まれるようになったピラミッド・テキストである。そこにはオシリス神や太陽神ラーと王との結びつきが記され、王に開かれている特別な世界としての来世観が反映されている。その後、ピラミッド・テキストは時代を経るとコフィン・テキストへと遷移していく。このテキストは、主に棺の内側に記され中王国時代まで使用された。内容はピラミッド・テキストを土台としているが、そこには王族中心の来世観ではなく民衆をも含めた古代エジプトの来世観が描かれた。これはオシリス神信仰の広がりによる埋葬形態の変化から、身分には関わりなく個人の埋葬準備によって来世での復活が可能になったことが示されている。また、コフィン・テキストには死後の様子も描かれていた。オシリス神が存在する冥界にたどり着くまでには、様々な困難や障害が待ち受けており、それを克服した後に死者は冥界にたどり着くとされていたのだ。コフィン・テキストにはその過程で必要になる守護や障害を乗り越えるための呪術などが記されている。

コフィン・テキストはその後、新王国時代に現在「死者の書」と呼ばれているものに変化を遂げる。「死者の書」は約200種類の呪文で構成されており、その呪文の中から幾つかを被葬者自身あるいはその家族が呪文を選択し、1つの「死者の書」として巻物などに編纂したものが葬儀で使用された。内容はコフィン・テキストとほぼ同じである。死後に様々な試練を乗り越えてオシリス神のもとにまでたどり着いた後に「最後の審判」が行われ、イアルの野と呼ばれる来世と考えられた場所に進む道のみが描かれていた。つまり来世で死者が生前と同じような生活ができるようにと準備されたものであったのである。「死者の書」も最初は棺に記されていたが、新王国時代以降はパピルスの巻物として遺体のそばに置かれるようになった。これまでのテキストとの相違点は、いくつかの場面に挿絵が施されていることである。その場面のひとつに、先述の「最後の審判」がある。「否定告白の場」とも呼ばれるこの場面は、古王国時代の墓にも描かれており、古代エジプトの死生観(来世観)の基礎を作ったものだと

いえる。この場面では、死者が生前に「マアト」（正義・秩序）という古代エジプト特有の考えを、生前に遵守し過ぎていたかを確認する儀式が行われる。「否定告白」はエジプト各地の守護神である42柱の神々に対して否定告白をする場面であり、死者が行う「否定告白」の儀式で発言したことに嘘がないかどうかを、天秤の片方に心臓を乗せ、もう一方には真理の「マアト」である女神の羽根を乗せて重量を比べる儀式である。心臓は、死者の生前の行いをすべて記録していると考えられていたために天秤に載せられる。両者がつりあわずに天秤がどちらかに傾けば、死者の行った罪の「否定告白」の儀式での供述はすべて嘘であると判定された。天秤がつりあわない場合、心臓が天秤の上から転げ落ち怪物アメイトに食べられるのである。心臓を失ってしまえば自身の肉体を失ったことになることから、来世での復活再生ができない2度目の死「再死」を迎え、その死者は理想のあの世を表したイアルの野にもたどり着くことができず終わってしまう⁽²⁾のだ。

イアルの野は、葦の野・供物の野という別称がある。来世で過ごす場所として描かれたこの地は、太陽神やオシリス神へ捧げられる供物が育つ土地でもあった。たどり着くことができれば生活は保障されており、死者はそこで来世でも生前と同じ作業にあたった。農業に従事していたものは農作業を、漁業を営んでいたものは漁業にあたり、来世でも働かなくてはならなかったのである。そのため、副葬品のひとつにはシャブティという死者自身の身代わりに働く人形を埋葬するようになる。また、死者の世界が身近にあったことを示す史料として古代エジプト特有の遺物である「死者への手紙」がある⁽³⁾。

「おおメメリ、メルティの家に生まれし者よ。西方の第一人者オシリスは、あなたに鼻から呼吸を与えることで、そして地平線の女主人ハトホルの御前においてパンとビールを与えられることで永遠の時をもたらすであろう。あなたは天と地の神々の命によって、悠久の時を生きている者ようである。あなたの家族、あなたの兄弟、そしてあなたの母に向かって悪意を持っている男女の敵に対して、あなたが妨害させますように。

息子であるメメリへの母からの手紙

あなたはこの地において素晴らしい人でありました。また、ネクロポリスにおいても同様の人となりましょう。あなたのために祈願を添えた供物が作られるでしょう。あなたのためにヘケル祭⁽⁴⁾が行われ、ウアグ祭⁽⁵⁾で祝われることになりましょう。そして西方の第一人者オシリスより、パンとビールが与えられるでしょう。あなたは小帆船で下流の流れに沿い夕暮れに船旅をし、上流を遡る船旅を朝方にするのでしょう。その旅中、すべての神々の名の元に、あなたが正しい人であるとされるでしょう。ご存じのように彼は私に言ったのです。「あなたとあなたの子に対して知らせを伝えるであろう者、それは私である。」あなたが正しい場所にいることを彼らに伝えましょう。⁽⁶⁾

このように「死者への手紙」には、死者に対しての弔いや願い、あるいは現世に残されたものが自身の報告を死者に行う内容が書かれている。これらは古代エジプト人たちの墓から出土し、現時点で10数例が確認されている。⁽⁷⁾陶製の鉢の表面や亜麻布、またはパピルスに書かれ、古王国時代から新王国時代までの期間にエジプトの各地から出土しているのである。⁽⁸⁾死者に向けて手紙を送るという行為は古代エジプトにおいて特別な行為ではなく、伝統的に行われていたものだったのだ。これらの事例からも、死者や死後の世界が常に身近にあると考えられていたことがみて取れる。そしてこれら「死者の手紙」からは、死後、現世と同じ生活を来世でも送ることができるという思想が存在したことがわかるのである。

死後、死者となった者はミイラに加工される。この行為は来世に渡り向こう側で生活を送る際、現世で活動をしていた自身の肉体が保存されていることが絶対的な条件であったためである。死者が来世で生きるためには、死者の魂の器である肉体、すなわちミイラが必要であった。ミイラは自然乾燥によって生み出され、後に肉体保存のための加工処理技術が進歩していくにつれ保存技術が発展したとされている。意図的・人工的に作られたミイラの出現の時期に関しては、先王朝時代以前のバタリ期（紀元前5000年頃から紀元前4000年頃）まで遡るといふ指摘がある。⁽⁹⁾この時期には儀礼的な意味で、死者に樹脂をしみこませた包帯を巻いていたとされている。さらなる発展は初期王朝時代後半の第

2王朝に始まる。第2王朝では、ミイラの頭部から足のつま先まで全身を樹脂のしみこんだ亜麻布で包んだ。肉体自体は腐敗が進んだが、外見は亜麻布で包むことによって保存が維持されていたのだ。最古の完璧なミイラは古王国時代第5王朝に年代づけられたメイドゥム出土のミイラだとされている⁽¹⁰⁾。しかし、腐敗を防ぐために行われた防腐処理技術の一環であった内臓を取り出し、それらを納めるカノボス箱がそれ以前の第4王朝に発見されている。クフ王の母ヘテプヘレス王妃のものであったその箱はミイラ作製が行われていたことを示しているために、最古のミイラ、またミイラ作製はヘテプヘレス王妃以前にすでに行われていた可能性が高いのである。

このようにミイラに加工する死体保存技術の発展とともに、本来は王や王族のみであったミイラ作製の習慣は社会全体に普及・浸透し、プトレマイオス朝時代とローマ時代にはあらゆる階層に広く知られるようになる。この過程で、王や庶民を問わず多くの人々が死後の魂がやどる器である肉体が永遠に保存されることを望み、死生観・来世観が創られたと考えられるのだ。ミイラに加工された肉体が破壊されると、死後、来世での生活ができなくなると考えられていたために、古代エジプトにおいて遺体をミイラに加工するという行為は、葬送儀礼の中において非常に重要であり中心となっていくのである。

そのミイラとともに準備され、埋葬されたのが副葬品であった。副葬品には数多くの種類があるが、死後、「死者の書」で知られる冥界への旅の中で使用されるものや、来世において必要になる生活用品などが存在する。それら数多くの副葬品からは、古代エジプト人たちの死者への守護や彼らが死者を手厚く葬った様子が見受けられる。中でも他文化に見られない副葬品のひとつに前述したシャブティがあげられる。シャブティはミイラの形をした小像であり、古王国時代の墓に副葬された小さな彫像や模型から発展したものだと考えられている。またシャブティの発注は、親族によって被葬者の死後に行われたものとされている。そのために、埋葬までごく短い期間でシャブティ生産は行われていたとする見解がある⁽¹¹⁾。先述したようにシャブティは来世にたどり着き生活を送る際に、死者が自身の代わりに労働をさせる目的で作られた。新王国時代には個数が増大し、ミイラの姿を模したのではなく日常生活で使用されて

いる服装で表されたものがみられるようになる。また、監督官の役割を担うシャブティも出現する。もともと、シャブティの数は数体であったが、後に数が増大しシャブティの小像を収めるシャブティ箱が作られるようになる。この時期のシャブティには、ミイラ形のもの人が人の形を模した小像であるシャブティの中に入れられ、さらにそのシャブティが箱に入れられるといった入れ子型の構造をしているものが知られている。「死者の書」では第6章がシャブティの章になっており、シャブティが自らの仕事を完遂する様子が書かれている。

「おお、シャブティよ、(死者の名)が死者の国にてなすべきあらゆる仕事―野を耕し、地に水を引き、東より砂を運ぶこと―を命じられしときは、『ここにおります』と汝は答えよ。『わたしがいたします』⁽¹²⁾と」

この第6章からは、死者の代理として労働する義務がシャブティには課せられていただけではなく、死者の代わりに受け答えをしていたこともわかるのである。

この他にも、家具・装身具・鏡・宝石・レリーフや彫像といった多種多様なものが埋葬された。副葬品の種類の多さはその被葬者の現世での豊かさを表すものでもあった。同時に、それらは埋葬時から始まる冥界への旅路での手助け・守護の役割を担うもの、また来世での暮らしの中で必要とされるものでもあったのである。副葬品がなければ、遺体をミイラに加工して墓に埋葬されたとしても、冥界へたどり着くことも、そして来世で暮らすことすら困難になったからだ。また、現世に残された自身の遺体を護るための副葬品がなければ遺体損傷の危険性があり、なにかしらの異変が生じた際には復活することもできず、古代エジプト人たちが描いていた死後の再生復活が妨げられてしまう可能性があった。古代エジプトで行われた葬送儀礼の中で、古代エジプト人たちが墓や自身の遺体と同様に副葬品へ非常に強い関心を持っていたことは明らかなのである。死生観や葬送儀礼が古代エジプト特有の文化として成り立っていく過程で、死後の生活・再生復活を護るために使用された副葬品の種類が広がったことは、彼らがそれらに強力な必要性を見出していたことを意味するであろう。

第2章 副葬品の中のカノボス容器

多様な副葬品の必要性については前章で示したが、本章では副葬品に関するこれまでの先行研究を踏まえ、各時代における副葬品の種類の差異について述べる。その結果、本論の主題であるカノボス容器が各時代でどのような扱われ方をしたのかを確認し、カノボス容器の重要性を提示する。J.テイラーは葬送儀礼のための準備が、古代エジプト全時代において常に来世へ向けたものだったと指摘している⁽¹³⁾。S.メスケルは副葬品として扱うものの種類の流動性とその品々の数と質について取り上げ、被葬者が亡くなった際の社会的・経済的地位が副葬品の内容に大きく関係したことについても言及している⁽¹⁴⁾。G.ピンチは、時代を経ると副葬品だけではなく埋葬様式全般が縮小化してくることに對して、必ずしも経済的な低下を示しているものではないとしている⁽¹⁵⁾。

初期王朝時代には、あらゆるものが副葬品として収められた。古王国・中王国・新王国時代すべてにおいて、棺・カノボス容器・シャブティ・彫像・アミュレット・宝石・服・家具・化粧道具・武器・娯楽楡品・楽器・食料等が副葬品の典型的な例として挙げられるとS.T.スミスは指摘している⁽¹⁶⁾。初期王朝時代から古王国時代には、供物としての意味を持つ飲食物を入れた容器、日常的に使っていた家具や装身具などが中心に埋葬された。死後、旅している間の生活で不自由がないようにするために、生前の生活をそのまま墓に持ち込んだと考えられるのだ。この時代から副葬品の種類や用途は多様化する。第1中間期から中王国時代第12王朝の半ばまでは、日用品やその模造品を中心とした内容から、より副葬品の種類の拡大の傾向が見受けられるようになる。

中王国時代の副葬品については、J.リチャーズが種別のリストを作成している(表1参照)⁽¹⁷⁾。彼は棺・家具・彫像・容器・宝石・道具類・石製容器・カノボス容器⁽¹⁸⁾・化粧道具・魔術用具は、すべて典型的な副葬品の種別だとしている。それらはさらに大きく2つに分類することができ、ひとつは高位の人々の葬儀に使用するために作られた副葬品であり、一般的に高価な副葬品の類とされた。もうひとつは、日用品である。これらの品々には多様な原材料が使用されてい

た。ヌビアからの金や東方からのラピスラズリといったもの、地域的に入手可能であった準宝石の類(カーネリアンやアメジストといったもの)、また沿岸部などの地域に原料が限られたファイアンスや貝、そして土器の材料である粘土があげられている。副葬品には、人工的な遺物と上記にあげた金・ラピスラズリのような原材料が加工されずそのまま使用されたものもある。中でも原材料はエジプト国内で入手可能であったものが多く使用された。しかし、リチャーズによると中王国時代においてはこれらの原材料の種類が大幅に制限され、副葬品に使用できた人々は限られたと考えられている⁽¹⁹⁾。この時代における様々な原材料使用の縮小が副葬品に影響していることについて、これは中王国時代における中央政府の権力後退の衰えが原因であるとの見方がある。そのことから彼はこの時代の副葬品にみられる差異化を考える重要性を示しているとして⁽²⁰⁾いるのである。

また、中王国時代における特徴のひとつとして、副葬品を含む埋葬の多様化の進展があげられる。埋葬習慣において、埋葬に関するすべてのものを用意することができない中間層と呼ばれる人々が、どこに力を入れるかによって埋葬の形態は変わっていった。墓自体を重視するか、それとも副葬品の充実を図るのかという選択の中で、被葬者あるいはその家族の意思が反映される埋葬形態が行われたのだ。

副葬品種別リスト	
埋葬用品	棺・カノボス容器
儀式用品	机・石碑
陶製の容器	壺の類
宝石類	ビーズ・アミュレット・首飾り
彫像	人間や動物の彫像
日常生活品	家具や家事道具
容器	アラバスター製の花瓶やボウル
特殊道具類	専門的な職業道具

彫刻類	パピルス・印章
化粧道具	化粧道具・コール墨のスティックや容器・鏡
他	娯楽用品

(表1:中王国時代における主な副葬品)

第2中間期から新王国時代初期にかけては、スミスがテーベ西岸で発見された未盗掘または未盗掘に近い第17・18王朝の墓に埋葬されていた副葬品を検証し、埋葬のために用意された副葬品と被葬者が生前使用していたものとを分類している⁽²¹⁾ (表2参照)。

	埋葬用品	日常生活品
全階層共通	棺、装身具	木箱 化粧道具
中間層	シャブティ、彫像、花束・花輪、護符、スカラベ、カノボス容器	職業上の道具、杖、サンダル、衣類 椅子、ベッド、食物
上位中間層	シャブティ、彫像、花束・花輪、護符、スカラベ、カノボス容器、パピルス・ゲーム ミイラマスク	職業上の道具、杖、サンダル、衣類 椅子、ベッド、食物石製・金属製容器、 亜麻布、上記以外の家具
エリート層	シャブティ、彫像、花束・花輪、護符、スカラベ、カノボス容器、パピルス、ゲーム、ミイラマスク、多重棺、防腐処理した肉、特別な彫像、オシリスベッド	職業上の道具、杖、サンダル、衣類 椅子、ベッド、食物、石製・金属製容器、 亜麻布、上記以外の家具、ガラス器

(表2:スミスによる新王国時代における副葬品分類)

スミスの副葬品分類では副葬品はそれ以前よりも多様化しているように見えるが、階層ごとに大まかな基準ができているようにもみて取れる。全階層共通のものはここで分けられるエリート層・上位中間層・中間層すべてに埋葬がみられた。しかし、その他の埋葬用品と日用品はスミスの分類表を参考にする限り、最低限必要な副葬品であった。ここでは中間層が最低限必要な埋葬品を示しており、上位中間層、エリート層と階層が上がることで副葬品の範囲が広がっている。また、エリート層に王族も含まれると考えられるため、特別な彫像・オシリスベツド⁽²²⁾は、エリート層の中でも王族に限られたものだった。また、W. グラジュツキーの新王国時代における階層別の埋葬形態の(表3参照)⁽²³⁾とをスミスの表と照合すると、中間層に当たる人々とは農場経営者、職人、兵士あたりまでだったことが推測される。

埋葬形態	階層
装飾付き玄室と神殿	王族
装飾付き玄室	役人貴族、聖職者
小規模な墓と装飾付き玄室	下吏
小規模な墓と装飾なし玄室	農場経営者、職人、兵士 (労働人口)
さらに小規模な墓または副葬品なしの墓	農場労働者
副葬品なし	社会に属さない人々

(表3:新王国時代におけるエジプト社会の階層・埋葬形態)

第3中間期には、埋葬用品の規模の縮小化が目立つようになる。エリート層の副葬品の減少、また埋葬儀礼の中心であった墓の衰退は、念入りに行われてきた埋葬準備に対して、この時期大きな変化が訪れたことを示唆している。飲食物の供物は発見されているが、それまで埋葬されていた家庭的・日常的な供物はみられなくなってしまった。ほとんどの墓が、棺・シャブティ・カノボス

容器・護符といった、埋葬のための特別な副葬品のみを保有していたのである。それらは比較的高価なものであり、これまではエリート層や富裕層に適していた副葬品であった。新王国時代までは多くの副葬品が必要とされ、それに伴って埋葬には多くの資産も必要であった。しかし、棺・シャブティ・カノボス容器・護符といった副葬品が重要な役割を持つようになると、それぞれの機能は維持しつつ、安価に生産されるようになった⁽²⁴⁾。これらの副葬品にはファイアンス製のシャブティの他に、護符や装身具がある。さらに新王国時代後半以降、ファイアンス製のものが中心となっていく⁽²⁵⁾。これは石や木と異なり量産が可能になったために、以前より幅広い階層に普及したことが原因と考えられる。各時代の主要な副葬品のデータを概観すると、スミスが指摘しているように最低限必要なすべての副葬品の中に、カノボス容器(壺)が含まれていることがわかる。本来、自身の遺体や墓の用意をした上で金銭的に余裕があった者たちだけが持つことのできた副葬品に、常にカノボス容器が含まれていたのである。カノボス容器は内臓を保存する目的でつくられたために、ミイラの作製時に内臓をどう処理していたのが重要になる。ヘロドトスやディオドロスの記述を参考にすると加工技術には高価なものから安価なものまでという段階が存在し、その中で内臓の処理を含んでいる加工を選択できた者だけがカノボス容器を使用していたと考えられるのだ。そのため、カノボス容器の副葬品内における位置づけとしては、この容器が基本的には一部の間層を含む富裕層用の高価な副葬品として扱われてきたということになるのではないだろうか。グラジュツキーの新王国時代の表を参考にすると、裕福な農場経営者や職人、兵士といった人々にとってカノボス容器とは副葬品と認識されていたと考えられるからである。

重要な副葬品としてカノボス容器自体が目目されるのは、第3中間期以降である。この時期ミイラの防腐処理技術の向上によって、カノボス容器に収められるべき内臓が再び体内に戻されるという現象が起きる。このためにカノボス容器は本来の役割を失うが、内臓が入っていないダミーの容器として副葬品の一種に残存していく。カノボス壺の中身には、ナトロンで内臓の形を模したものが入れられることも確認されている⁽²⁷⁾。そこにはカノボス容器が本来の役割

である内臓を守護するという目的から離れ、ダミーとしてでも残した理由が存在すると考えられる。その後の末期王朝時代では、ミイラ作製の際に内臓は体内に戻され、本来、内臓を保存・守護する役割を持つカノボス容器は形式的な副葬品として使用されていくのである。全時代を通じ、その前身である内臓を入れた箱型の容器から末期王朝時代まで、埋葬の際に用意されるべき副葬品の最低限必要な範囲の中にカノボス容器は入っていた。このことから、古代エジプト人たちがミイラ加工を施した自身の遺体のみならず、内臓という自分の遺体の一部に対しても同じような認識を持っていたことが分かる。このような認識こそが、古代エジプトにおけるカノボス容器の重要性といえるのである。

第3章 カノボス容器の特異性

数多くの副葬品の中で、遺体を収めているのは遺体を加工したミイラを収めている棺と、内臓の一部を収めているカノボス容器のみである。この観点から、カノボス容器に対するさらなる副葬品としての特異性を見出すことはできないだろうか。その際にまず考慮すべきは、副葬品は墓の構造が複雑になり、部屋数が多くなると遺体が置かれる玄室ではなく、別の部屋に埋葬される点である。王族や高い身分の者であれば別に副葬品用の部屋が用意され、そこに家具や化粧道具といった品々が埋葬されていた。しかし、カノボス容器は棺の近隣、または棺が安置された玄室内に置かれている。このことから、カノボス容器には他の副葬品とは根本的に異なる特別な性質や意味があった可能性がある。

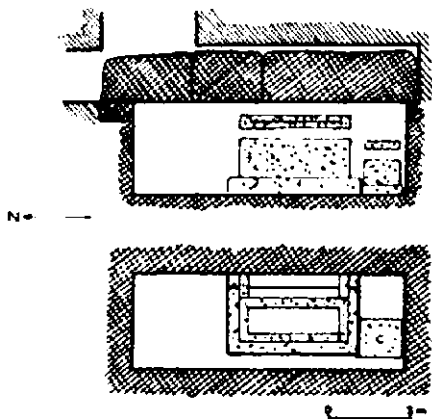
スネフェル王の治世である古王国時代第4王朝初期からすでに、カノボス容器は遺体の近くに置かれていた。現存している最古のカノボス箱は、先述したヘテプヘレスのものである。遺体は現存していないが、方解石でつくられたカノボス箱の内部は4つに仕切られており、玄室内の西壁の南端に置かれていた。カフラー王の玄室では、石棺の南東の位置にカノボス容器が置かれている。この時期、一般的にカノボス箱の位置は南北方向に横たわる遺体の足付近である南側に置かれていた。それらは壁のニッチや、床に穴をあけて安置された。第4王朝までは臓器を収めるだけであったが、第5王朝では壺に王名が刻まれるよ

うになる。テティの玄室内においても、石棺の南東にあたる場所からカノボス容器が発見されている。ペピ1世のカノボス壺は、玄室内の床に花崗岩をくりぬいて造った備え付けの方形容器に壺を入れて南東の方角に置かれたことが確認されている。メルエンラー1世も同様の方角であったが、棺の下に作られた窪みにカノボス容器が置かれていた(図1参照)。⁽²⁸⁾



(図1:メルエンラーの石棺下窪みに収められたカノボス容器)

基本的には中王国時代でも古王国時代と同じように遺体は南北方向に置かれた。カノボス容器のほとんどは玄室内の南に置かれていたが、アメンエムハト2世の墓では、玄室内の石棺から離れた北東にカノボス容器が置かれていた。



(図2:アメンエムハト3世の玄室内石棺とカノボス容器配置図)

しかし、アメンエムハト3世の場合は、玄室内の壁に作られたニッチに置かれて⁽²⁹⁾いる(図2参照)。他の墓でも、遺体の足側である南東がカノボス容器の安置されるべき場所であったことが伺える。⁽³⁰⁾センウセレト1世は、石棺の下にカノボス容器を収める窪みを作った。またセンウセレト3世は石棺が収められている玄室の壁にニッチを作り、そこにカノボス容器を収めた。第2中間期までカノボス容器はほとんどが石棺と同室の玄室内に収められるが、新王国時代からは墓によって差異がみられるようになる(表4参照)⁽³¹⁾。

人物	墓番号	カノボス容器の位置
トトメス1世	KV1	棺と同室内
被葬者不明	KV42	号墓の玄室の最奥で石棺と同室内
トトメス4世	KV43	玄室内の倉庫
アメンヘテプ3世	WV22	石棺頭部の上の窪み
被葬者不明	KV55	玄室内南壁の壁龕
ツタンカーメン	KV62	玄室宝物庫内 他の副葬品は副室
アイ	WV23	玄室とつながるカノボス室
セティ1世	KV17	カノボス厨子
ラメセス2世	KV7	玄室の側室
メルエンプタハ	KV8	カノボス厨子破片
アメンメセス	KV10	玄室内奥からカノボス容器(ラメセス2世の娘タカトのもの)
サブタハ	KV47	玄室内
ラメセス7世	KV1	玄室内に置かれた棺の両側にある窪みがかノボス壺を収めたものではないか
チュウヤとイウヤ	KV46	玄室内 チュウヤのかノボスはひとつひとつがミイラの模型をしており、イウヤは簡素
マイヘルプリ	KV36	カノボス容器・厨子 玄室内

(表4:王家の谷におけるカノボス容器の出土)

新王国時代におけるカノボス容器としては、以上のものが王家の谷で確認されている。棺と同室内に容器が確認される例は数例しかないが、玄室に付属する倉庫・宝物庫にほぼ置かれている。また、アイはカノボス容器を収めるためにカノボス室を造室している。新王国時代以降、多くのカノボス壺は、通常棺と同じ玄室のニッチに置かれ、新王国時代以前に遺体の足下に置かれていた場所とは異なり、遺体の側面に配置された。

副葬品は新王国時代までに数多くの種類が作られるようになるが、その中でもカノボス容器は遺体をミイラに加工する技術に伴い、葬送習慣が確立する初期の頃に作りだされた古いタイプの副葬品であることから注目に値する。またカノボス容器は遺体の一部を含んでいたために、古代エジプトの死生観を考えると副葬品の中では棺に納められた遺体に次ぐ重要な存在であった。古王国・中王国時代まではペピ1世やセンウセレト1世のように棺の下に窪みを作り、そこにカノボス容器を入れた例もある⁽³²⁾。新王国時代になるにつれて墓の構造が複雑化し、玄室内に複数の部屋が増築される。そのため、棺が安置される部屋とカノボス容器が収められている部屋とがわけられることがあるが、棺とカノボス容器を近隣に配置することで、自身の遺体のミイラを収める棺と内臓を収めるカノボス容器がひとつの部屋にまとまり、復活の際に容易に自身の体を取り戻せることを望んだのではないだろうか。時代の流れにより墓の形態が変化していく中でも、カノボス容器は棺との結びつきが強かったことが埋葬の位置関係から分かるのである。

また、カノボス容器は遺体を収めている棺と多くの類似点がみられる。棺に描かれ、カノボス容器にも表される神々、また棺に横たわる遺体とカノボス容器に収められる内臓を遺体に置き換えた時の体の向きが一致していることなどである⁽³³⁾。ここから、棺とカノボス容器とは本来同類の副葬品であるのではないかという可能性を提案できる。

棺とカノボス容器に描かれる神々であるが、まずカノボス容器に関わる神々は以下の表のとおりである(表5参照)。

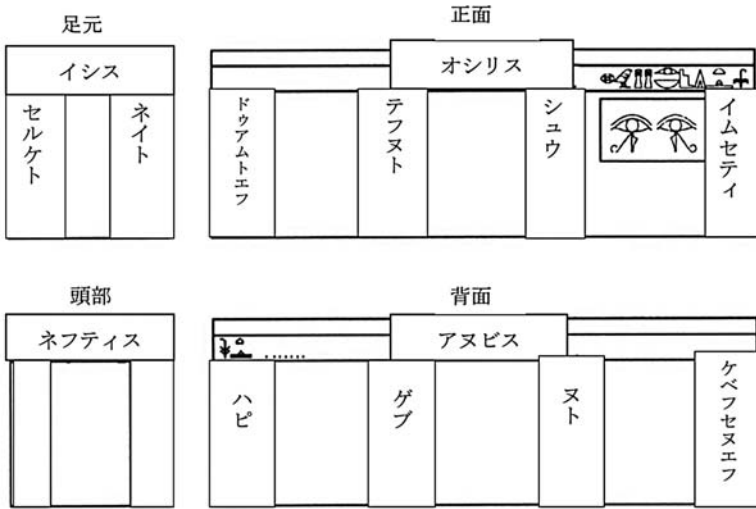
内臓	守護神	姿	守護女神	方角
肝臓	イムセティ	人間	イシス	南
肺	ハピ	ヒヒ	ネフティス	北
胃	ドゥアムトエフ	ジャッカル	ネイト	東
腸	ケベフセヌエフ	ハヤブサ	セルケト	西

(表5: 「ホルスの4人の息子たち」・守護女神)

内臓をそれぞれ守護するのは、「ホルスの4人の息子たち」と呼ばれる神々と、内臓が入った壺・容器の守護を司る守護女神である。「ホルスの4人の息子たち」には守護する内臓がそれぞれ決まっており、守護女神は方角が位置付けられている。そして、この神々たちは棺にも同じような方向にヒエログリフで名が記されている(図3⁽³⁴⁾参照)。

「ホルスの4人の息子たち」は、棺の四隅または端に描かれる。イムセティとハピ、ドゥアムトエフとケベフセヌエフはそれぞれペアの関係にあり、その組み合わせで配置が変わることもあった。これは、それぞれの組み合わせが「ブトのバア」「ネケン(ヒエラコンポリス)のバア」と呼ばれ、互いに強く結びついていたからだ。ブトとヒエラコンポリスは先王朝時代から続く下エジプトと上エジプトの重要な町である。この組み合わせは古代エジプトを象徴するものであると同時に、北と南という方角とも結びついていた⁽³⁵⁾。守護女神であるイシスとネフティスは姉妹の女神であり、中王国時代に死者の棺の両端に描かれた。この位置は、オシリス神の復活の儀式を行った際の立ち位置を示したものである。また、ネイトとセルケトが加わった4柱の女神は全員が葬祭に従事し、冥界の神であるオシリスやその妻(妹)のイシスに関わる女神たちである。

また、図像表現にも棺と同類であった可能性をみることができる。古代エジプトで描かれた壁画の中に棺の絵が出てくる際、棺の下の空間に「ホルスの4人の息子たち」が描かれているものが知られている。遺体をミイラに加工する際に使われた台下の空間部分に4柱が描かれているのだ。運ばれた遺体の下にカノポス容器の神々として扱われている「ホルスの4人の息子たち」が描かれてい



(図3:石棺に描かれる神々)

るといふことは、ミイラに加工された遺体とカノボス容器に入っている内臓が、一体であったと認識されていたことを意味すると推測できる。そのため、遺体が収められている棺とカノボス容器は強いつながりをもっていたと考えられるのである。

カノボス容器が棺と関連性が高かったことを示すものとして、古代エジプトの葬送において新王国時代に扱われた宗教文書の「死者の書」の挿絵が挙げられる。

図4の中段には、棺の下にカノボス容器が描かれている。⁽³⁶⁾「死者の書」は新王国時代の宗教文書であり、この挿絵から古代エジプト人たちがカノボス容器を棺の下に入れていた古王国・中王国時代の習慣が新王国時代に受け継がれていたことがわかるのである。

また、図5の棺を墓に運ぶ挿絵の場面(向かって左端)でも棺とともに運ばれるカノボス容器(カノボス厨子)の様子が描かれている。⁽³⁷⁾新王国時代になると玄室の中に複数の部屋が作られ、カノボス容器を棺の下に作った窪みに入れたり、石棺と同じ部屋に置くような習慣はなくなったが、「死者の書」に反映され



(図4:死者の書第153章 中段に描かれた、ミイラが横たわる棺の下にカノポス容器が描かれている)

た古代エジプト人の葬送習慣の中では、カノポス容器の位置は棺と一体であるということが示されているのである。また、ヘレニズム期にアレクサンドリアで作られた地下墓地コム・エル＝シュカファの墓の内部、主屋である礼拝所の奥壁のレリーフには、古代エジプトの神々がミイラを作っている場面が描かれている(図6参照)⁽³⁸⁾。そこでもベッドの下にカノポス壺が並べられている様子がみてとれる。



(図5:死者の書第8章)



(図6:古代エジプトの神々が描かれたミイラ作製場面を描いたレリーフ)

さらに、この地下墓地の主屋の隣のカラカラ・ホールと呼ばれる地下墓において、壁画が2枚発見されている。図7はミイラ作製を描いた⁽³⁹⁾壁画、図8はギリシア神話の一場面を描いた壁画⁽⁴⁰⁾であり、どちらも上下で1枚が構成されている。2つの壁画は、上部分がエジプト風に描かれており下部分はギリシア風に描かれている。この壁画の共通のテーマは、古代エジプトの文化として根ざしていた「死者の再生復活」を意味するものである。上部分のエジプト風に描かれたレリーフの中央部分には、ミイラを横たわせライオンの形をしたベッドが描かれている。その周りを取り囲むのはイシス・ネフティス・ホルスといった神々である。そして、どちらのレリーフにもベッドの下には再生復活の象徴でもあるカノボス容器が配置されている。

このようにギリシア世界との融合が行われたアレクサンドリアにおいても、



(図7:カラカラホール対第一号墓のミイラ作製を描いた壁画)



(図8:ギリシア神話の一場面を描いた壁画)

カノボス容器の存在は確認できるのである。古代エジプトの中王国時代まで棺の下に窪みを作り埋葬されていた容器が新王国時代に図像表現として描かれるようになり、末期王朝時代が終わり周辺地域から様々な文化が流入して来る中でも、カノボス容器は再生復活の際に不可欠であったことが人々に知られていたことがこの壁画からもわかるのである。

おわりに

以上第1章では、古代エジプトの葬送儀礼における死生観・来世観を概観することで稀有な葬送儀礼における副葬品の必要性和その役割を確認した。また「死者への手紙」から考えられることは、古代エジプト人たちが常に死者の存在を意識して生活を送り、死者や死後の世界が常に身近にあると考えていたことがわかった。死後、現世と同じ生活を来世でも送ることができるという来世観は彼らにとって、自然の中から見出した自身のサイクルであった。第2章では、各時代において階層別にどのような副葬品が必要とされていたかを確認することによって、カノボス容器がどの階層に用いられていたのかを検討した。その結果カノボス容器を作製することができたのは、経済状況に余裕のある裕福層のみであったことを確認した。一方でカノボス容器は、全時代において用意すべき最低限の副葬品の中に入っていることも分かった。第3章では、副葬品のカノボス容器が持つ特異性として、カノボス容器が埋葬場所に置かれた位置、神々との関連性、「死者の書」に見られる図像表現を取り上げた。カノボス容器が置かれる位置は墓の構造の複雑化とともに変化がみられるが、古王国時代には棺と同室の玄室内に置かれ、棺の足元の位置または棺の下に窪みを作って安置された。その習慣は時代を経るにつれ変わっていったが、新王国時代の「死者の書」の中で、カノボス容器が棺とともに運ばれ、ミイラが収められる棺が横たわる台の下に「ホルスの4人の息子たち」の装飾がされた容器として描かれている。ここから、たとえ実際に墓内に置く位置に変化が生じていたとしても、カノボス容器に対する考え方は常に棺と同類の存在というものであり、遺体とカノボス容器の位置として考えられることは、古王国時代から変わらずに続く

「棺の下」であったのではないだろうか。

カノボス容器の特異性を見出すことで、これまで明らかではなかった古代エジプトの葬送儀礼の中の新たな役割が見えてくると考えている。例えば棺と同類であったことである。また、カノボス容器が出現したのは棺よりも後の時代である。そのため、カノボス容器は棺の影響を受けつつ発展していった可能性もある。今後両者の発展に注目したい。

謝辞

本論を執筆するにあたり、ご助言を賜りました和田浩一郎先生に記して御礼申し上げます。

註

- (1) Wilkinson, T, *Dictionary of Ancient Egypt* (London, 2005), p.43.
- (2) アメミトとは、複数の動物の身体を組み合わせた神話上の生物で、頭部が鰐であることから鰐の神として扱われることもある。アムムトとも呼ばれ、女神であり、その名前は「貪り食うもの」、完全な意味としては「死者を貪り食うもの」であった。この役割を持つ冥界の神として「心臓を食うもの」とされ、悪人として生きたものや冥界に近づくことを許されない者たちを滅ぼす存在だと考えられていた。
- (3) 「死者への手紙」については次の論文を参考。内田杉彦「古代エジプトの「死者への書簡」における死者」『オリエント』29号、1986年、16-30頁；同「古代エジプトにおける生者と死者との互惠関係に関する一考察：アクとアク・イケル・エン・ラー」『オリエント』33号、1990年、125-127頁；大城道則『古代エジプト死者からの声 ナイルに培われたその死生観』河出書房新社、2015年、9頁；同「カノボス容器に見る古代エジプトの死生観」『死生学年報』、2015年、73-74頁。
- (4) ヘケル祭 (haker-feast) とは、葬儀の前夜にアビドスで行われた祭。起源は古王国時代までさかのぼるとされ、ソカル祭 (soker-feast) とともに主な葬祭である。死者の書第18章において、死者の航跡中に祭が行われている記載がある。Assmann, J., *Death and Salvation in Ancient Egypt* (London, 2005), pp.266-267.
- (5) ウアグ祭 (wag-feast) は、古代エジプトにおいてナイル川の氾濫の月の17日18日19日に行われ、氾濫の季節の到来とそれによってもたらされる生命の復活を祝う祭典である。葬送儀礼におけるウアグ祭の研究はまだ十分になされていないが、ピラミッドテキストによれば「オリオンとしてオシリスが来た際、ウアグ祭の期間は彼

がワインの王である」との記述があるために、オシリス神との関係が深く、再生復活を示唆する祭りであることがわかる。Mu-Chou, Poo, *Wine & Wine Offering in the Religion of Ancient Egypt* (London, 2014), p.149.

- (6) Wentz, E., *Letters from Ancient Egypt* (Atlanta, 1990), p.214.
- (7) 内田、前掲論文、1986年、16頁。
- (8) 大城、前掲書、2015年、10頁。
- (9) 高宮いづみ『エジプト文明の誕生』同成社、2003年、57頁。
- (10) 大城、前掲論文、2015年、75頁。
- (11) 熊崎真司「デール・アル=マディーナにおけるシャブティの生産体制」『史観』第168号、2013年、159頁。
- (12) Allen, T.G., *The Book of the Dead, or, Going Forth by Day* (Chicago, 1974), p.6.
- (13) Taylor, J. H., "Changes in the Afterlife", in Wendrich, W., ed., *Egyptian Archaeology* (Oxford, 2010), p.223.
- (14) Meskell, L., *Archaeologies of Social Life* (Cambridge, 1999), p.366.
- (15) ここでピンチが例として挙げている副葬品は、棺、カノボス容器、シャブティ、オシリス像、葬祭文書、石碑である。
- (16) Smith, S.T., "Intact Tombs of the Seventeenth and Eighteenth Dynasties from Thebes and the New Kingdom Burial System", *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 48 (1992), p.195.
- (17) Richards, J. *Society and Death in Ancient Egypt* (Cambridge, 2005), p.85を参考に作成。
- (18) 文中ではchest with the containers for the preservation of the internal organs of the deceasedと表現されている。
- (19) Bourriau, J., "Patterns of Change in Burial Customs during the Middle Kingdom" in S. Quirke (ed.), *Middle Kingdom Studies* (New Malden, 1991), p.11.
- (20) Richards, *op. cit.*, p.85をもとに作成。
- (21) Smith, S.T. *op. cit.*, p.205をもとに作成。
- (22) オシリスベッドとは、オシリスの苗床と呼ばれる新王国時代の王墓で発見された副葬品のひとつである。オシリス神の形をした木製の枠からなる。それは土で満たされ、大麦の種が蒔かれている。墓の中での大麦の発芽は、オシリスの勝利—豊饒、植生、復活の神としての—と再生の約束を象徴している。トビー・ウィルキンソン著、大城道則監訳『図説 古代エジプト文明辞典』柊風舎、2016年、82頁。
- (23) Grajetzki, W., *Burial Customs in Ancient Egypt* (London, 2003), p.85を参考に作成。
- (24) 和田浩一郎『古代エジプトの埋葬習慣』ポプラ社、2014年、202頁。

- (25) ヘロドトスによると、ヘロドトスは著書『歴史』のなかでミイラ作製の方法について以下のように述べている。「…職人たちは遺体が運び込まれてくると、絵具を用いて実物に似せた木製のミイラの見本を、運んできた者たちに出して見せる。その説明によれば、最も精巧な細工のものは去る尊い姿（中略）をもしたものであるといい、これよりも細工が雑で価格も安いのが二番目、そして三番目に最も値段の低廉なもの、という風に見本が示される。」ヘロドトス著、松平千秋訳『歴史』岩波書店、1971年、95頁。
- (26) デイオドロスによると、ミイラ作製には価格により3段階あったという記述がある。またミイラ作製は世襲制であったことを述べ、また政策時に書記と切り裂き役という役割を持つ人物が存在したことを述べている。デイオドロス著、飯尾都人訳『神代地誌』龍溪書舎、1999年、121頁。
- (27) Ikram, S. & Dodson, A. *The Mummy in Ancient Egypt* (London, 1998), p.197.
- (28) Dodson, A. *The Canopic Equipment of the Kings of Egypt* (London, 1994), Plate V.
- (29) Ibid., p.31.
- (30) Ibid., p.20.
- (31) Reeves, N. and Wilkinson, R. H. *The Complete Valley of the Kings* (London, 1996) を参考に作成。
- (32) Dodson, *op. cit.*, pp.22-24.
- (33) Roth, A.M. & Roehring, C.H. “Magical Bricks and the Bricks of Birth” *The Journal of Egyptian Archaeology* 88 (2002), pp.121-139.
- (34) Ikram & Dodson, *op. cit.*, p.197.
- (35) Raven, M. Egyptian “Concepts on the Orientation of the Human Body”, *Journal of Egyptian Archaeology* 91 (2005), p.42.
- (36) Faulkner, R. O. *The Egyptian Book of the Dead the Book of Going Forth by Day* (New York, 1994), p.150.
- (37) Ibid., *op. cit.*, p.38.
- (38) 大城道則『古代エジプト文明—世界史の源流—』講談社、2012年、181頁。
- (39) 同、183頁。
- (40) 同、184頁。

参考文献

- A・J・スペンサー著、酒井傳六・鈴木順子訳『死の考古学』法政大学出版局、1984年
 イアン・ショール&ポール・ニコルソン著、内田杉彦訳『大英博物館 古代エジプト百科辞

- 典』、原書房、1997年 (Shaw, I. & Nicholson, P., *The British Museum Dictionary of Ancient Egypt* (London, 1995))
- 内田杉彦「古代エジプトの「死者への書簡」における死者」『オリエント』29号、1986年、15-30頁。
- 「古代エジプトの「死後の世界」」『明倫歯科保健技工学雑誌』5号、2002-2003年、58-63頁。
- 「ミイラ—永遠の命が宿るもの—」『明倫歯誌』12号、2009、43-50頁。
- 大城道則『古代エジプト文明—世界史の源流—』講談社、2012年。
- 「カノボス容器に見る古代エジプトの死生観」『死生学年報』、2015年、71-88頁。
- 熊崎真司「デール・アル=マディーナにおけるシャブティの生産体制」『史観』第168号、2013年、157-159頁。
- 近藤二郎『エジプトの考古学』同成社、1997年
- ジョン・H・テイラー著、鈴木麻穂訳『ミイラ解体』学芸書林、1999年 (Taylor, J. H., *Unwrapping Mummy* (London, 1998))
- 高宮いづみ『エジプト文明の誕生』同成社、2003年
- 森本岩太郎「ミイラ作りのための内臓摘出術」『日本赤十字看護大学紀要』12号、1998年、1-8頁。
- 和田浩一郎『古代エジプトの埋葬習慣』ポプラ社、2010年
- Allen, T. G., *The Book of the Dead or Going Forth by Day* (Chicago, 1974).
- Assmann, J., *Death and Salvation in Ancient Egypt* (Ithaca, 2005).
- Bains, J., and Lacovara, P., "Burial and the Dead in ancient Egyptian Society" *Journal of Social Archaeology* 2-1 (2002), pp.5-36.
- Eyma, A. K., & Bennett, C. J., *Delta-man in Yebu: Occasional Volume of The Egyptologists Electronic Forum* No.1 (USA, 2003).
- D'Auria, S., lacovara, P., and Roehirng, C. H., *Mummies & Magic: The Funerary Arts of Ancient Egypt* (Boston, 1998).
- Dodson, A., *The Canopic Equipment of the Kings of Egypt* (London, 1994).
- Faulkner, R. O., *The Egyptian Book of The Dead The Book of Going Forth By Day* (New York, 1994).
- Grajetzki, W., *Burial Customs in Ancient Egypt* (London, 2003).
- "Class and Society: Position and Possessions" in Wendrich, W. ed., *Egyptian Archaeology* (Oxford, 2010), pp.180-199.
- Griffiths, J. Gwyn, *The Conflict of Horus and Seth from Egyptian and Classical Sources: A Study in Ancient Mythology* (Liverpool, 1960).

- Hournung, E. *The Valley of the Kings: Horizon of Eternity* (New York, 1990).
- Ikram, S. & Dodson, A. *The Mummy in Ancient Egypt* (London, 1998).
- Mu-Chou, Poo. *Wine & Wine Offering in The Religion of Ancient Egypt* (London, 2014).
- Pinch, G. "Redefining Funerary Objects" in Hawass Z, ed., *Egyptology at The Dawn of the Twenty-first Century* Vol. II (Cairo, 2003), pp.443-447.
- Raisman, V. & G.T. Martin, *Canopic Equipment in the Petrie Collection* (Warminster, 1984).
- Raven, M. "Egyptian Concepts on the Orientation of the Human Body", *Journal of Ancient Egyptian* 91 (2005), pp.37-53.
- Reeves, N. *The Complete Tutankhamun: The King, the Tomb, the Royal Treasure* (London, 1990).
- Reeves, N. and Wilkinson, R.H. *The Complete Valley of the Kings* (London, 1996).
- Reisner, G. "The Empty Sarcophagus of the Mother of Cheops", *Bulletin of the Museum of Fine Arts* Vol. 26, No. 157 (1928), pp.76-88.
- *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire N^{os} 4001-4740 and 4977-5033 Canopics* (Cairo, 1967).
- Richards, J. *Society and Death in Ancient Egypt* (Cambridge, 2005).
- Roth, A.M. "Fingers, Stars, and the 'Opening Mouth': The Nature and Function of the NTrwj-Blades", *Journal of Egyptian Archaeology* 79 (1993), pp.55-79.
- Roth, A.M. & Roehring, C.H. "Magical Bricks and the Bricks of Birth", *The Journal of Egyptian Archaeology* 88 (2002), pp. 121-139.
- Smith, S.T. "Intact Tombs of the Seventeenth and Eighteenth Dynasties from Thebes and the New Kingdom Burial System" *Mitteilugen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 48 (1992), pp.193-231.
- Snape, S. *Ancient Egyptian Tombs: The Culture of Life and Death* (Chester, 2011).
- Taylor, J. H. *Death and the Afterlife in Ancient Egypt* (London, 2001).
- *Egyptian Coffins* (London, 1989).
- "Changes in the Afterlife" in Wendrich, *Egyptian Archaeology*, pp. 220-240.
- Teeter, E. *Religion and Ritual in Ancient Egypt* (Cambridge, 2011).
- Wilkinson, R.H. *Symbol & Magic in Egyptian Art* (London, 1994) (R・H・ウィルキンソン著、近藤二郎監修、伊藤はるみ訳『古代エジプトシンボル辞典』原書房、2000年)
- *Dictionary of Ancient Egypt* (London, 2008) (トビー・ウィルキンソン著、大城道則監訳『図説 古代エジプト文明辞典』終風舎、2016年。)

—————*The Complete Gods and Goddesses of Ancient Egypt* (London, 2003) (R・H・ウィルキンソン著、内田杉彦訳『古代エジプト神々大百科』東洋書林、2004年)

Wente, E. *Letters from Ancient Egypt* (Atlanta, 1990).

Wendrich, W. *Egyptian Archaeology* (Chichester, 2010).